

■■■ 山と山の靈魂 ■■■

I 山の神聖観

山を一種の他界と観じ、聖地と解する思想は、民間伝承はもちろん、文学等にもしばしば表れている。いわゆる隠遁伝説が山を対象としていたことは、例の平家の落人や源氏の残党が、海の彼方の島よりも、むしろ山に余生を保っていたことにも思い合わされる。人が死ねばその靈魂は山に往き、誕生が山の神の來臨を待って行われると伝承も全国的である。高僧も偉人もしばしば山に隠れたのも、何者かが彼らを喚ぶものがあつた。この点われわれ民族の生活は、山を離れて語ることは出来ない。一方、最高最古の歴史においてもわれわれの祖先は山によって出現されている。そうして最初に国都と定め給うた地は、やはりヤマトで国名もまたヤマトであつた。これらは要するに山を聖域として、淨地とする感情が興って働いていたことは否みがたい。

このように見てくると、歳を神を山から迎えたのも何ら矛盾でなく、一方生命の基礎である農耕を司る神が、山を本拠としたとして格別不思議はない。われわれの民間伝承では、山の神は一定の時期に里に降って田の神となり、田の神の還ってゆかれる先が同じく山であつた。村々に行われていた山の神祭りは、そのけじめで、農業祭が春秋二季に行われていたことにも深い関係がある。

民間伝承では、山の神の性格は同時に田の神の性格であつた。したがって春の田の神下ろしが、山に入って花を迎えることも、その理義は明瞭である。さらに稲の収穫を待って行われる祭りを秋上げといつて、田の神が山への還御を意味したことも、容易に納得がゆく。いわゆる秋上げの祝いは、いろいろの内容を持っているが、しかも収穫祭的性格に変わるところはないに拘らず、これを各地で山の神祭りといつている。そうして田の神が更めて山の神として、山に還られる日を考へていた。

この間の思想を最も端的に示していたのが信濃の諏訪または安曇地方の案山子上げである。案山子上げは収穫を了った日に行うを例としていて、要するに他地方の秋上げであつたことは、これを別に板箸を上げたと言つたのでも明らかである。その日は案山子を座敷や庭前に飾つて、その労を犒うというが、案山子は田の神の象徴であつて、その日を境に山の神になられたのである。だからこの日以後は、仮に田圃に案山子は立つていても、それはただの偶人であつた。田の神はすでに山の神として去られたのである。

われわれ国民の信仰では、祭りを受けるため降臨する神が、そのまま永く滞留することはあり得ないから、神下ろしに引き続いて神上げが行われる。したがって春祭りに降臨せる田の神は、祭りの終了と共に還御されるわけで、それを物語る作法も、例のさなぶり祝

い等を通して、十分に窺うことが出来る。あるいは田植えに引き続いて行われた虫送りには、祭りの後始末すなわち神上げの色彩が多分にある。稲の害虫の発生は、古代思想では、所在の定まらぬ靈魂の跳梁と考えていたから、神上げと同時に、これを別の世界へ送出する必要があった。稲虫送りを土地によってサネモリ送りと言ったのは要するにそれであって、サネモリは手塚太郎に滅ぼされた斎藤実盛の亡霊ではなくて、いわゆる田の神を意味する名であったことも、他の事例によって証明される。

しかし、稲作にはとかく障碍が多い。したがって農家としては、これを努めて排除したい切実感から、秋の収穫完了まで、神の淹留を希う情が強く働いて、春祭りに降臨のまま、秋の収穫期まで留まれる如き特殊の信仰を生むに至った。その間の過程も想像し得られる。

神の来往が山を中心に行われるくらいだから、人もまた山へ往來を必要とした。男子が成年を境に山に登ったのは全国的の風もあるが、女性もまた山に登る日があった。その一つの例として、薩摩の悪石島（大島郡）では、正月に初山と言って、成年の女は必ず山へ入った。そうして長短二本の物干竿を必ず伐って来るものとなっていた。ことにはじめて成年に達した者は、山から還ると、酒と煮メを用意して、村人の集まる日待の席に行って、披露をする習いであった。これはおそらく、男子のお山がけと同じく、山に入って成女の資格を得た古俗の遺風であると考えられる。

II 山の神の本質

山の神の名はわれわれにはかなり親しまれているにかかわらず、その本質は必ずしも明らかでない。あるいはこれを女性と言ひ、下世話に主婦を山の神と言ったのは、そこに根拠があるという。あるいは杓子を持つことから言い出した等の説もあるが、杓子を持つのは薩摩等ではむしろ田の神であった。それと言うのが山の神という称は、他の水の神等と同じく一種の汎称であって、山を本拠としてあるいはそこを通して存在の肯定される神の謂いであった。

新道では山の神は大山祇命といい、あるいは木花咲耶姫、磐長姫等の説もあるが、ともに山の神として、固定する神格を前提とする附会説に過ぎない。したがって一定の時期に里に降って、新たに田の神として顕現するものとはおのずから別である。しかもこの事実を基礎を置くと、それはまだ神格をも具備せぬ一種の靈魂と見做される。これには狩獵者の社会に伝えた行法等も有力な示唆を持っている。しかしその間の事情は後に譲るとして、等しく山の神と言っても、狩獵者の祀るものは一般概念にあるものとは別であるとの説がある。たとえば三遠地方の山地では、これを獵師山の神または狩人山の神という。または

秋田県阿仁合谷（北秋田郡）等では、^{またぎ}狩人の祀るのはサンジンまたはジュウニサマであって、杣、木挽等の祀るものが山の神であった。一見下らぬようであるが、こうして区別している。このような事例から言っても、その本質はすでに複雑であった。また福島県南会津、新潟県の山地等で、特にサガミまたはサガミサマと言い、九州の肥後、日向等では、山の神をコウサギというが、それは同時に野猪の心臓であったことも、このさい注意に値するのである。

さらに各地の狩猟者の社会に伝わった山立由来記の類に、祖神を大魔小魔、大万小万または万治万三郎というが、それらも帰するところは山の神であった。三河の熊谷家（北設楽郡豊根粟世）の狩の口伝書には祖神を大男神宿男神とある。ちなみに大男神は土地の伝承に対照して、オオナンジン、スクナンジンと解せられ、大汝に対する小名神を意味するかと思う。これに徹しても、山の神の名はその本質の象徴ではなく、どこまでも汎称であったことが判る。

秋田県阿仁合谷の^{またぎ}狩人の社会では、前にもいう如く山の神をもっぱらサンジンというが、その山入りの作法に現れた事実から言うと、それらはなお山野に漂遊せる一種の靈魂であって、格別に神格が保持されているわけでもまたそれによって顕現するものでもない。したがって彼らの山入りの本義は、必ずしも狩猟という経済行為ではなく、里を離れて特定の靈地には入って、この山の靈魂を各自の肉体に憑依を促し、狩人としての資質を獲得することにある。要するに嚴重なるお山かけであった。その作法が穢れを極端に忌むのも、山の靈魂の憑依に支障なからんことを期するにあつた。したがって、獲物を索めることは、相手の動物が持つところの靈魂を獲るためであった。その靈魂が彼らのいわゆるサンジンであって、狩りのある前には、その叫びが幽かに耳朶に響きその所在を予め知らせるとさえいう。

この間の過程は、他地方の狩猟者の作法にも多分に通ずるものがある。そうして一般伝承にいう山の動物の熊、鹿、猿、猪等が、時に山の神の化身とする説もおのずから首肯される。要するにこれらの動物が山の靈魂の象徴でありかつそれを保持または管理を意味している。したがって狩猟に際して、彼らが獲物の血をすすり肉を食い、あるいは肝、心臓、特に胎児等を一意目標にした理由の、何にあつたかを窺うことが出来る。靈薬としてまた経済的に価値が高い等はそもそも末で、本義はどこまでも靈魂の象徴であった。

Ⅲ サという靈魂

特に山の神ともまた靈魂とも言わぬが、遠・三・信を繋ぐ天竜川奥地の狩猟者に伝承さ

れたシャチは、明らかに山の靈魂であった。その性質等についてはかつて雑記『民族』に報告したから繰り返さぬが、要するに憑依する獵具によって現れる。したがって、狩りの守備はその憑依如何で左右される。シャチ丸といい、シャチ鉄砲というが、しかも一度これが遊離すれば、その物の具は廢具に等しかった。しかもその遊離は、一に穢れによって行われた。ことに興味を覚えるのは、これが記紀をはじめ『常陸風土記』等にいう幸であることは容易に首肯されるところで、幸弓、得物矢が幸の憑依する具であり、薩雄、佐豆人等の名が、やはりそこに關係のあることが考えられる。わが国で狩りの名譽ある者を薩夫と呼んだことも偶然でない。名古屋城天守閣の屋根に立つ鯨鉾は、別の面からシャチの威力とその性質を語るものとして更めて思い合わされる。

土佐香美郡等では、いったん獲物の体内を潜った弾丸が、さらに立木の幹に潜入した場合に、その樹木を玉入り木と称し珍重し、靈威あるものとして漁船の船材に用いるという。この事実も前記シャチの存在を肯定することによって一段と意味が深い。ことに遠三地方の狩獵者が、獲物に命中した弾丸を、シャチ玉として珍重し、次の弾丸製造の際に、親玉として加え、さらにシャチ玉を造った意味にも通ずる。これらは要するにシャチの所在が、獵具ではなく、むしろ動物の肉体であったことを語っている。前にも述べた北秋田の狩人が、山入りの際に索めたのも、実は熊の軀でもまた肝でもなく、それに象徴された威力旺盛な山の靈魂であったことがはっきりと肯かれる。

しかもこの種の靈魂を、文字によって伝える場合はシャチでありサチであって、形の上では一見異なった如く見られるが、直接に唇頭を發する場合は、薩摩で田の神をいうサツドンのように、サの音を強めた形に要約され、時にはスサとも変化する性質にある。ここに前提をおくと、山の神というサガミも、村の境に立つサイのカミも、さらに北秋田の狩人のいうサンジンも、山神の音読みのみとは断じがたく、ともに一つ糸に繋がって来る。その他田の神として顕現した中国地方のサンバイも、サバイも薩摩のサツドンも、その本質は山を本拠とする靈魂であった理由が、どうやら明瞭性を加えて来る。この間の経緯は、別に述べたからそれに譲る。そうして私のいわゆるサの靈魂を殻種に移し憑らせることが農の祭りの重要な部分で、やがてわれわれの国の狩獵生活の大きな目的であったろうこともこれまた述べたところである。

なお稲作を繞る民俗に、鯖が重要な役割を持ち、一方の信仰に深い關係のあったことは、鯖明神、鯖薬師の信仰に見ても明らかであるが、これもおそらくは山の靈魂を通して説き

ほごす道があったように思う。ことに鯖は現在のわれわれの目前にあるものは、格別に特徴もない一介の魚肉であるが沖縄県八重山島の名蔵岳の由来譚等にいう鯖は、鮫とまがうような凶悪勇猛な大魚として語られている。

今一つこの際つけ加えておきたいのは、各地にあるシャゴジ、サゴジ、シャモジ等言う神名である。これに社護神、左合神、尺神、杓子様の文字を宛てて、もっともらしい説明や断定を下しているが、その語頭の類似から考え、一方、古代信仰の残存であることから言っても、私のいう山の靈魂に関連して、今一度検討を加える必要を感じず。ことに山がわれわれすべての生活に深い交渉を持つことに思い至ると、等しくそこに登って快哉を叫ぶことにも、深い伝統の導きがあったのである。

古代日本人の神聖感の表現について、サという語が重要な地位を占めていたことは瀬良益夫氏も、文献について示されたが、さらに一般の幸福感を現すサチ、サキワイサカエ等の語が、何を基盤に成立したかも、山をめぐる民族によっておのずから求むる道があったように思う。